

中学校の生徒指導「教師は嫌われることを恐れない」

—私の実践を通して—

青梅市立新町中学校 森 通 政

東京都の中学校理科の教諭として奉職して11年。この短い間に様々な事例を経験してきました。その中で感じたことを実際の実践例を通して、中学校の生徒指導のあり方について考察したいと思います。

1 子どもたちのコミュニケーションツールの変化

私が教員となった11年前はようやくビジネスマンに携帯電話が普及し始め、10代の若者たちはポケットベル全盛の時代でした。駅の公衆電話では女子高生が列をなして、プッシュボタンを押している光景をよく見かけました。まだ、コミュニケーションの方法は直接会うことが主流の時代でした。それが数年すると、ちらほらと中学生が携帯電話を持つようになりました。とはいえ、持っているのは生活指導上、手のかかる子どもたちぐらいのものでした。それがここ5年で、大半の子どもたちが携帯電話を所有するようになり、コミュニティが大きく変化していったように感じます。

携帯電話が普及する前は、家にかかってくる電話などで子どもたちの交友関係を把握することができました。しかし、保護者を飛び越して直接子どもたちが携帯電話やメールで連絡を取り合うことができるようになり、全くと言っていいほど把握できていないと言える状況になっています。余程保護者が意識しないと自分の子どもが誰とつきあっているのかわからないのです。それに加えて、携帯電話はインターネットを使えるということで不特定多数の人間と接点を持つことができるため、悪意を持った大人とつながってしまい、最悪の場合犯罪に巻き込まれてしまったという事件が起きています。また、プロフや学校裏サイトなどに特定の人間への中傷の書き込みなどによるいじめも起きています。

このようなコミュニケーションツールの変化で、相手を思いやる気持ちがうまく育まれていない子どもたちが増えてきているように感じます。私の経験で次のような事例があります。休日、友だちの家に集まって個々人がゲームで遊んだり、時にはたわいもない世間話をしていたそうです。その中のA君がゲームや会話に飽きて、A君自身の携帯から「みんな死んじゃえばいいのに」という趣旨のメールを同級生数人に送信し、送られた同級生が激怒して翌日、A君につかみかかるということがありました。この件でA君を指導し、なぜそんなことをしたのかを聞くと「ただ何となく、おもしろそうだったから」と言うのです。直接、面と向かって「みんな死んじゃえばいいのに」とは言えないのに、メールだと送信できるのです。送られた相手がどう思うかも考えずにおそらくこのようなことは教員の知らないところで頻発していることは想像に難くありません。このように、相手がどう思うかを考えずに行動するかと思えば、最近「K/Y」という言葉に代表されるように、自分が相手にどう思われているかを非常に気にする。相手を傷つけてもあまり気にしないけれど、自分は傷つくのは大変怖がるというように非常にアンバランスに成長していると感じます。

2 実践事例

前項で述べてきたように、こどもたちは大きく変化してきています。人の痛みを理解し、心を育むためには教員はどのようにすればいいのかを私の実践事例を紹介します。

①「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことは決してしない。」

創価大学・創価学園の創立者池田先生が昭和48年4月11日第1回創価女子中学・高等学校の入学式で御講演された中に、「そこで私がいまから皆さんに望むことは『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という信条を培っていただきたいということでもあります。することなすことに、この心もち、実践していったならば、まれにみるうるわしい平和な学園が実現するでありましょう。(中略)皆さんのこれからの実践は、やがて地球を覆うにたる力をもつはずである、と私は確信したい。」との御指導をもとに、私はクラスの担任の願いとして、必ずこの先生の御指導を子どもたちに話し、クラス目標として掲げています。学活の時間、道徳の時間など折に触れて、話していました。何か個別の生活指導の場面でも「君のやっている行動は他人を不幸にしていないか」と反省を促していました。この目標が子どもたちに浸透しているなど感じたのは、初めて3年間持ち上がった学年の3年生のクラスです。あるとき、いじめがクラスで起こりました。いじめをしている生徒だけでなく、それを見ても止められないクラス全員に私は「一人が辛い思いをされていていいのか、それは人として絶対にあってはならないことだ。傍観しているのもいじめをしているのと同罪だ。」と心を込めて話をしました。個々の指導・支援を行ったことは言うまでもありませんが、いじめはおさまりました。しかし、私の思いはその時だけではなく、生徒たちの心に焼きついていたようです。卒業時に生徒たちがくれた作文で、B君は「いろいろ悪いことをして迷惑をかけたと思う。その度に俺と正面から話してくれた。最初は『えらそうなこと言うなよ』と思って聞いていた。けれど大きく変化したのがクラスでいじめが起きたとき先生がみんなに真剣に話をした。その時から俺の中の先生の変化が変化した。」とありました。

この3年間の折りに触れて、子どもたちに語り続けてきたことが知らず知らずのうちに心の奥に浸透し、いざというときに生きてくると思います。何事も遠慮せず、教師自身が正しいと信じることを子どもたちへ訴え続けることだと思えます。何度言っても同じではなく、聞いていなくてもかまわない、毛穴から浸透させるんだとの強い思いは必ず通じていくのだと実感しました。

②「すべての子どもは生きる力に満ちている」

前項の事例の子どもたちの卒業を間近に控えた時のことでした。校長から「もう一度3年の担任をお願いできないか」と言われました。その生徒たちは、小学校から申し送りですでに喫煙などの非行行為をはじめ、いじめの問題を端に発した保護者も含めた対教師不信が非常に強いなど、入学式からおしゃべりがやまない、落ち着きの全くなく、1年・2年でもいじめ、教師に対する暴言など問題を数多く起こしていました。そのため、2年間で学年所属の教員が3名病気休職になるなど、他学年から見ても大変そのものでした。そこへ、飛び入りの3年、それも担任という、尻込みをするような状況でした。でも、私とその学年に入らなければ、学校が立ちゆかない、ここで逃げてはと決意し、引き受けることになりました。

明けて4月、始業式の日。クラスへ行ってみると、「こいつは誰だ」と言わんばかりの視線を送るC君がいました。C君は人の話を落ち着いて聞かず、目立つことで自分の存在をアピー

ルするタイプで、過去に授業中に床をはいつくばったり、奇声をあげたりなど、いろいろな場面で手がかかる生徒です。それ以外にも、不登校傾向の生徒などそれはバリエーション豊かなクラスでした。そこで私がどんなクラスにしたいとの思いを込め、創立者池田先生の御指導のもとに「何のため」という目的意識と「他人の不幸の上に自分の幸福を築くようなことは決してしない」と「担任の願い」を話しました。しかし、C君だけでなく話をしても落ち着きが無く、まず話を聞ける状態をつくることからのスタートでした。それに加え、3日目に女の子一人が「クラスに仲のいい友だちがいない、だから学校に行きたくない」と、学校に来なくなりました。そして、クラス内の女子のいじめが発覚、それを見ていることがつらいという理由でいじめとは直接関係のない女子生徒がまた一人不登校に、修学旅行後にそのいじめの被害者のDさんが不登校になるなど、3名の不登校。一人一人に個別に面談、家庭訪問・クラスの生徒へ指導などを繰り返すもののなかなか事態は好転せず、授業中もC君を中心に落ち着きのない雰囲気、まじめに頑張ろうとしている生徒からも「クラスがつまんない」などの不満もでるなど八方ふさがりの状態でした。そうこうして、1学期最後の保護者会の朝、いじめが原因で不登校となったDさんの母親から電話があり、「いじめは絶対にいけないこと」「それを苦に登校できずにいること」「いじめについて各家庭で話し合っしてほしい」との話をしたいと申し出がありました。クラス38名中28名出席する予定だったので、これをチャンスととらえ、学級懇談会で話をしてもらいました。私からもクラスの実態を包み隠さず話し、協力をお願いしました。そんななかで1学期が終わり、夏休みに進路に関する三者面談で何人もの保護者から、「学級懇談会を機会にいじめについて、親子で話をしました」「すべてを話してもらってよかった」などの反響があり、Dさんの面談でそのことを伝えました。保護者の方は話してよかったと言ってくれ、本人も進路のこともあるので、2学期からは学校へ行くと話してくれ、その本人の言葉通り、完全に復帰することができ、あと2人は何とか別室登校をできるようになりました。

そんな不登校の問題が好転し始めたとき、落ち着きのないC君の問題行動が続発し始めたのです。朝は、遅刻は当たり前、教室へ入ってもやる気がないからと保健室へ逃げ、そこへ追いかけて行くと「うるせえ」など暴言を吐き、そのことに対して指導しようとする腕を振り回して暴れる、ものを蹴飛ばす、時には教師を突き飛ばすなど行動は徐々にエスカレートしていきました。私の授業のあいている時間はすべて別室登校の生徒2人に勉強を教え、それがなくなるときはC君の指導、時には暴れるC君を取り押さえるなど生活指導に追われる日々でした。一歩も引きませんでした。いつのまにか腕に大きなアザができていたこともありました。C君の行動はさらにエスカレートし、正直「C君さえいなければ」との思いがよぎることもありました。しかし、クラスは全員がそろって、クラスなんだと勇気を振り絞り、C君にダメなものはダメと真正面からぶつかっていきました。

そうすると、あまり協力的ではなかった保護者も次第に協力してくれるようになりました。そんな私を見てか、他の生徒たちはC君を見放すことは決して無く、あたたかく接してくれるのです。その光景を見て、私はこみ上げるものがありました。「この子たちはすごい」と。このころを境に、クラスの雰囲気は大きく変わって行きました。C君を含め、落ち着いた学校生活を送れるようになったのです。授業に来る先生方からも「授業がしやすい」「研究授業をするなら森先生のクラスで」「すごいいい雰囲気になった」などお褒めの言葉が多く聞かれるようになり、生徒もそのことでより一層頑張るようになりました。卒業を控えた3月の合唱コンクールにもクラスの子どもたちは、お互いがお互いを励まし、すばらしい合唱を聞かせてくれました。担任である私と生徒一人一人とは、しっかりとつながっている実感もっていました。

た。

教師の真剣さ、本気さが子どもたちに与える影響はすごいものがあると感じます。こちらが一步でも引くような態度を取れば、子どもたちはそれを見逃しません。どんなときも真正面からぶつかっていくことが大切だと思います。決してあきらめずにどこまでも子どもたちの可能性を信じ抜く教師の姿勢がクラスの雰囲気、C君を変えていったのだと思います。

3 まとめ

我々教師、いや人間は誰も他人から嫌われたいと思っていないでしょう。好かれないと願うのが普通だと思います。教師は常に子どもたちと接しているわけですから、その子どもたちから好かれたほうが良いに決まっています。しかし、あえてタイトルにも掲げたように「嫌われることを恐れない」としたのかというと、嫌われることを恐れるあまり言うべきことを言えなくなってしまうのではないかと思うからです。子どもたちは厳しい先生よりも優しい先生を選ぶでしょう。しかし、現実、厳しい先生全員が嫌われていて、優しい先生全員が好かれているのかということとそうではないようです。

厳しいだけだと、その教員の前ではいい子でいる。もしくは、人間関係が崩れ、結局指導が入らなくなってしまうケースがよくあります。逆にやさしいだけではなめられてしまう結果となり、やはり指導が入らなくなる。いずれの場合もやがて「心ある生徒」すなわち学級・学校を支える生徒が「この先生に言っても無駄」のような無力感をもち、より一層集団の統率が取れなくなってしまうという負のスパイラルに陥り、最悪の場合学級・学校が崩壊してしまうこととなります。

我々教員はどうしても生活指導上課題をもっている子どもたちに目が行きがちですし、関わりもやはり多くなってしまいます。他の子どもたちは、その子どもたちに接する態度をよく見えています。この先生はどれだけ本気なのかを。そのことを常に意識していかなければなりません。教師がやるべきことは、子どもたち同士で学びあい、支え合い、成長できる環境をつくっていくことだと思います。実践事例でも私一人の力ではなく、クラス全員の協力、支えがあってはじめてC君が学校で居場所を見つけ、落ち着いて生活できるようになったのだと確信します。

私たち教師は決して嫌われることを恐れずに、子どもたちと真正面からぶつかっていくことが肝要だと思います。一時は嫌われることもあるかもしれない。しかし、教師の熱い思いは必ず子どもたちの心に通じると信じていくことで、本当の意味で好かれる教師、信頼される教師となっていくのではないだろうか。

負のスパイラル

